

風景 (1)

山

口英

龍門岳の中のくらしいふところ  
白い滝が立っていた。

誰もいないから  
昔から鳴りつづけていた。

そばでは白い花が  
びびとふるえていた

ふりかえると

いちめんのみどり

風が歩いているのがみえた

(一九七二)

風景 (2)

くらい谷をおりてくると  
ばあっと

いちめんのげんげ田だ

人ひとりみえない

どこへきたんだらう

うまくにげさせたのか

鯉のぼりが泳いでいる

やっぱりここはニッポンか

(一九七二)

風景 (3)

せまい山峡の空の下  
すでに封土も失って  
うずくまっているような灰色の巨石群

ほんとうはかわってしまったのに  
かわらなかつたようにみえてくる

ある日 とつぜん  
がらんがらんと  
くずれおちるかもしれない

入目に眼をほそめながら  
その時をしきりに待つ

(二九六九)

書評

大正アナキズムの問いかけるもの

アナキズム系新聞へ労働運動の復刻版

戸田 広 介

ここに復刻出版された「労働運動」は、アナキズムの系列に属する人々によって大正中期から昭和のはじめにかけて(一九一八年八月―一九二七年一〇月)五次にわたり断続的に刊行された、大衆の新聞である。ただし第五次は雑誌型で発行され、これは本書からは除かれている。

大正期後半の、第一次世界大戦とロシア革命、そして国内的には米騒動という歴史的なうねりのただ中から「労働運動」は誕生する。そして歴史の舞台に階級として公然と登場したプロレタリアートの動向と同調しつつ、大杉栄をはじめとする著名の、あるいは無名の運動者の

苦闘に支えられて刊行されつづけた。半世紀のちの今、私の前に置かれた五百ページ近いこの集成は、なによりも大正即社会主義運動の姿を現在によみがえらせる豊富な集積として遺されているのであり、私が試みる書評は結局部分的な指摘にとどまるだろう。その点を念頭におきつつ、今一歩立ち入ってみたい。

ロシア革命と米騒動という内外の激動を起点とし労働紙がはじまったことは冒頭に記した。以後八年間にわたって歴史の進行とともに同紙も歩む。五次におよぶ年月の経過のうえに、社会運動史上の事項を重ね合わせるこ

とによって、緊密な対応関係を知ることができるであろう。

労運紙の流れを追いつつ気づくのは、五次にわたる同紙が固定的な編集上の方向づけに貫かれていたのではなく、各次はいずれもそれまでの運動の整理の上にならず、それぞれの方向を持っていることだ。この点については本書に添えられている簡潔な解説のなかで大沢正道が的確にふれている。すなわち、第一次～二次労運の方向が「ロシア革命を震源地とする世界革命の一環としての日本革命をいかにして遂行していくか、という課題に即応し」それを「ロシア革命の支援とか擁護とかいうキャンペーンの方向に向けてではなく、日本革命の遂行という主体的な姿勢で表現した」（大沢正道）ものであった。それはより具体的には、一次における白紙主義、二次におけるアナ・ボル協同戦線としてあらわれる。この編集方針が三次においてさらに変化するのは、「ロシア革命のボルシェビキ的歪曲と挫折というあらたな局面、つまりロシア革命に呼応して日本革命を遂行するというこれまでの単純明快な方式ではもはやすまされない。革命を歪曲し、挫折させたボルシェビキとの闘争をぬぎにして、日本革命の勝利はありえない」という観点から、ボルシェビキ批判の方針が生まれた。大震災の直後、大杉が権

力に虐殺されてのちも同紙は続けられるが、そこではこのボル批判にさらに力点が移されいく。それは、アナキズムの労働運動の分野における影響力の衰退にしたがい、狭く固定されていった。

大沢正道は概略右のようにのべている。おなじく本書に収められている短文のなかで河本幹次はやや観点をかえ、労運紙の変化の指標をサンジカリズム運動におき、それとの対応関係で二つの時期に大別している。すなわち前期の「サンジカリズム混成期」と後期の「サンジカリズム淘汰期」である。同紙の初期における荒畑寒村・山川均・堺利彦らの執筆協力、さらに第二次における高津正道・近藤栄蔵らとの共同編集は、思想的にはアナキズムとマルクス主義にわかれていても、サンジカリズムの線では協同戦線を形成しえたことをしめしている。これが破れるのは、一九二二年夏、第一次日本共産党の結成と時を同じくして発表された山川の方向転換論以後である。周知のように山川はここで、組織・戦術の両面において、従来のサンジカリズム路線をへく破り、政治闘争重視と協同戦線党理論を軸とする山川イズムの確立にむかう。これを契機に労運紙はアナルコ・サンジカリズムの色彩をより強めるわけである。

それ自体複雑な要素をはらんでいる労運の八年の歴史

を、今みてきたように大沢正道のあるいは河本幹次の観点をダブらせることでより深く理解できるのではないかと思う。

さて、内外の激動につき動かされて誕生した当初の労運紙は、大正中期の社会運動の上昇を反映して発刺たる若さに満ちている。それは、その後のアナキズム運動の凋落を知る者にとっては一種のおどろきを感じるほどのものだ。そこには教条や理論の押しつけはなく、逆に労働者大衆の自発的な精神に沿いつつ、いかに運動を広め深めていくか、という点に注がれている。階級意識のへん入りではなく、現実そのものに多くを語らせようとする態度。そのための内外の社会・労働運動の精力的な報道。第一次の労運には毎号各地の大小の労働争議一覧表が掲載されている。編集上のこのような姿勢が、上昇期の労働者大衆の若々しく開放的な意識と合致したであらうことはまず間違いない。残念ながらそれは時の経過にしたがって、たとえば前述の争議一覧表がいつのまにか消えてしまうことからわかるように、徐々に崩れていく。しかし第三次の紙面までは、この姿勢は基本的には維持されていた。

この姿勢——労働者大衆の内発性に依拠する革新思想

・運動創造への志向——は、歴史の前後を通じてやはりユニークなものであったと私は思う。それは当時労働運動の主流を占めていた友愛会、その指導者である賀川豊彦にみられるように、おなじく運動の上昇の気運を土台とした、開かれた思想を特徴としながら、結局のところ運動の内部に上下の序列と異質な部分への拒絶を持ちこまなければすまないというようなものではなかった。また、この時期につづく昭和初期の社会主義運動に急速に浸透することとなる福本イズム（それはいわゆる二七年テーゼによって否定されるが、その後の日本共産党を貫通する基本的体質である）のごとく、革命運動への第一歩が閉鎖的な党派性の確立と、現実を切り捨てることで成立する、自己の共産主義的意識純粋化運動としてはじまるという倒錯を含むものでもなかった。

労働者大衆の内発性による革新思想の創出という課題が運動の場で追及されたことはこれ以前にも以後にもなかったのだ。おそらく労運にかかわる人々も、この点についての十分な自覚はもっていなかった。そうでなければ、この課題は今すこし粘りよく追求されていたであらう、アナ・ボル論争の場に進出して自らをアナキストとして純化していく前に、である。

ともあれ、たてまえばどうであらうと八革命は前衛の

の問題である。誰もが疑わなくなったそれ以前の一時  
期に、革命は民衆の問題である。と実感として把えてい  
た人々があつたのだ。労働紙はこのことを教えてくれる  
そして、この古く困難な問題について考えることを改め  
て私たちにせまるのである。

（最後に）したが、この貴重な幻の新聞を今日簡単  
に手にし得るのは、同紙を作り、支え、現在に伝え  
てきた多くの人々の献身によるのであり、さらに直  
接的には黒色戦線社の大島英三郎氏の犠牲的な努力  
の結果である。私たちはそれを氏に感謝しつつ、本  
紙が世の出版資本によってではなく、仲間の手によ  
って復刻出版されたことを誇りにしているのである。

#### ▲労働運動▼ 一〇四次完全復刻

並製・五〇〇〇円

発行・黒色戦線社

大杉栄主幹、新聞「労働運動」（第一次〜第四次）  
完全復刻

タフロイド版 本文四七〇頁 箱入

定価五、〇〇〇円（送料発行所負担）

大杉栄、近藤憲二の執筆編集の姿、望月桂の文と画

序文 古川時雄、河本乾次、杉藤二郎、三浦精一

解説 大沢正道

権藤成郷著作集第二巻「農村自救論・日本農制史談」

菊版 五〇〇頁 箱入

定価三、〇〇〇円（送料発行所負担）

「自救論」は当時のベストセラーでこれを読んで涙  
し、五・一五、二・二六事件の部隊は決起、「農制  
史談」は発禁の原本の完全復刻

発行所 黒色戦線社

〒三七二 群馬県伊勢崎市中町和田 大島英三郎方

振替 宇都宮 一〇一五